

鹿児島県総合教育センター

平成27年度長期研修研究報告書

## 研究主題

# 生徒の主体的な学びを引き出す 国語科学習指導の在り方

—社会科や理科との連携を図った説明的文章における  
単元構想と言語活動の工夫—

志布志市立松山中学校  
教諭 日高 佳子

## 目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	1
3	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	実態調査	
(1)	生徒に対する実態調査等の結果と分析	2
(2)	教師に対する意識調査等の結果と分析	3
(3)	調査結果等を基にした本研究の方向性	4
2	研究主題に関する基本的な考え方	
(1)	「生徒の主体的な学びを引き出す」とは	5
(2)	「国語科における他教科等との連携」とは	6
3	生徒の主体的な学びを引き出す国語科学習指導の構想	
(1)	他教科等との連携を図った単元構想と言語活動の意義	6
(2)	社会科や理科との連携を図った説明的文章における単元構想と言語活動の工夫	6
4	検証授業Ⅰの実施と考察	
(1)	検証授業Ⅰの概要	10
(2)	検証授業Ⅰのねらい	10
(3)	検証授業Ⅰの単元構想と言語活動の工夫	10
(4)	検証授業Ⅰの実際	12
(5)	本単元における評価と社会科や理科との連携	13
(6)	検証授業Ⅰの成果と課題	15
(7)	検証授業Ⅰの課題を踏まえた指導法の改善	16
5	検証授業Ⅱの実施と考察	
(1)	検証授業Ⅱの概要	16
(2)	検証授業Ⅱのねらい	16
(3)	検証授業Ⅱの単元構想と言語活動の工夫	16
(4)	検証授業Ⅱの実際	20
(5)	本単元における評価と社会科や理科との連携	24
(6)	検証授業Ⅱの成果と課題	26
IV	研究のまとめ	
1	研究の成果	26
2	今後の課題	27

※ 引用文献・参考文献

## I 研究主題設定の理由

国際化や高齢化、情報化社会等の到来によってめまぐるしく変化する社会を自分らしく生きていくためには、直面する課題に主体的に関わり、自ら考え、解決する「生きる力」を育むことが一層重要視される。「生きる力」を支える学力の重要な要素である「思考力・判断力・表現力等」の育成を図るため、学習指導要領において各教科等に重要な視点として「言語活動の充実」が位置付けられている。国語科には、教科目標の実現とともに、実生活で生きて働き、各教科等の学習の基本となる国語の能力を育成することが求められており、特に文章を読解し、自分なりに思考し表現する「読むこと」の学習は、言語活動を充実させる国語の能力を育成するという点においても重要な役割を担っている。

さらに、平成23年5月に文部科学省から出された『言語活動の充実に関する指導事例集』には、言語に関する能力育成のための国語科と他教科等との効果的連携の必要性が述べられている。しかしながら、これまでの国語科の授業を振り返ると、教材文の内容読解を優先する言語活動であったり、単元ごとに学習を収束させる形になっていたりして、実生活で生きて働く国語の能力の育成という視点での言語活動が十分に行われていなかったように思われる。そのため、授業が内容読解に終始し、生徒自身に自己の国語の能力の高まりを実感させるまでに至らなかったのではないかと感じている。生徒の主体的な学びを引き出すには、生徒に「国語科の学習で身に付けたことは実生活の場でも生かすことができる」ということを意識させることが必要であり、そのためには、教師自身が国語科として実生活や各教科等の学習に必要な国語の能力を育成する役割を担っていることを強く自覚し、丁寧に手立てを講じることが重要であると考えます。

以上の点から、生徒の主体的な学びを引き出すため、国語科の学習で身に付けた力を他教科等の学習の場で生かすことを想定した単元構想や言語活動、評価の在り方を工夫したいと考え、本研究主題を設定した。なお、国語科の果たすべき役割を考えれば、全ての領域において検証すべきところではあるが、限られた時間での検証であるため、汎用性という点を十分に考慮した上で、領域を限定した研究にしたい。そこで、今回は、各種調査の結果から、本校の生徒にとって課題でもある「読むこと」の説明的文章に焦点を当て研究を進めることにした。説明的文章では、「文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読むこと」等が指導事項や言語活動例として挙げられている。学習の中で行われる言語活動と国語科の指導事項において関連した点が多い社会科や理科との連携を意識して研究を進めたい。

## II 研究の構想

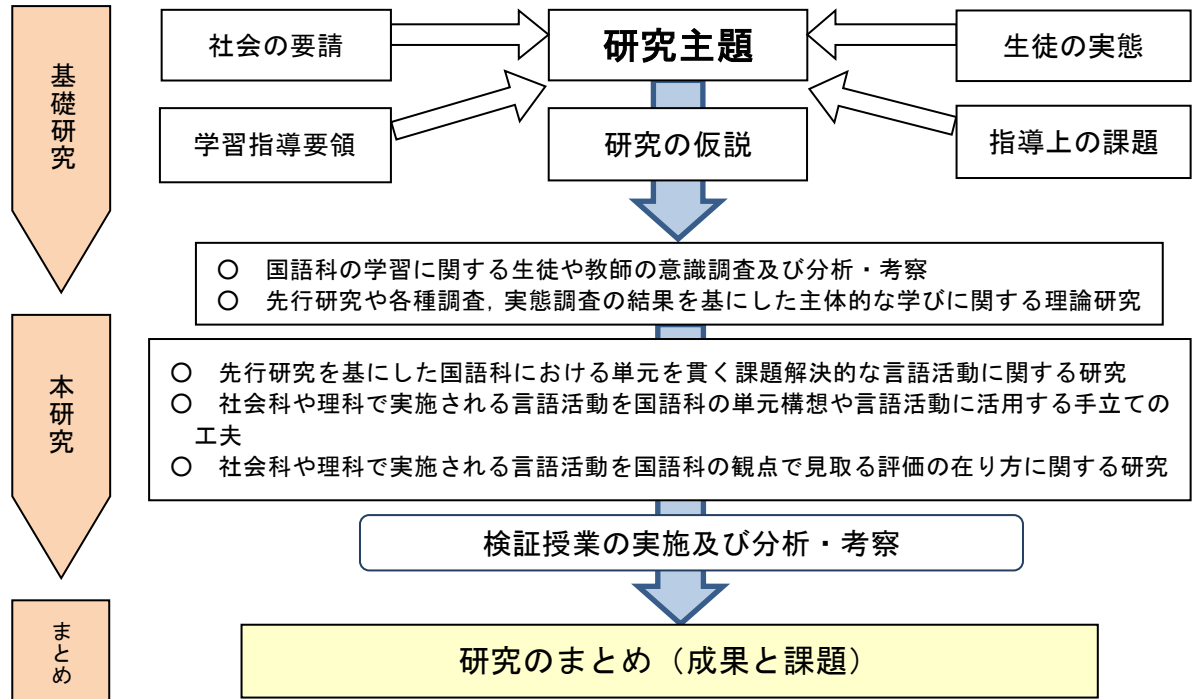
### 1 研究のねらい

- (1) 国語科の学習や言語活動に関する生徒や教師の実態調査を行い、分析する。
- (2) 先行研究や各種調査の結果、実態調査を基に、主体的な学びについて明らかにする。
- (3) 先行研究を基に国語科における単元を貫く課題解決的な言語活動について明らかにする。
- (4) 社会科や理科で実施される言語活動を国語科の単元構想や言語活動に活用する手立てを明らかにする。
- (5) 社会科や理科で実施される言語活動を国語科の観点で見取る評価の在り方を明らかにする。

### 2 研究の仮説

国語科の授業において、社会科や理科との連携を意識した単元を構想し、言語活動の設定や評価の在り方を工夫することで国語科の学びを実感させることができれば、生徒は学習に対して意欲的になり、主体的に学ぼうとするのではないかと。

### 3 研究の計画



## Ⅲ 研究の実際

### 1 実態調査

#### (1) 生徒に対する実態調査等の結果と分析

##### ア 本校生徒の実態

本校は志布志市の北部に位置する中学校で、一学年40人程度の小規模校である。素直でおだやかな生徒が多く、落ち着いた雰囲気の中で学校生活が繰り上げられている。

本校区には三つの小学校があり、入学してくる前からお互いに見知った間柄で、3年間転出入等による入れ替わりもほとんどないことから、運動や学習において集団内の序列ができやすく、人間関係が固定化しやすい環境にある。また、本校は鹿児島県の公立高校、私立高校の他に、都城市にある私立高校への進学も可能なことから、他地区に比べると高校進学への危機感が乏しい状況にある。

このような環境的要因も影響し、本校生徒の学習意欲の高まりや学習に対する主体的取組については課題が感じられるところである。日頃の授業においても姿勢を崩さず静かに授業を受け、与えられた課題について真面目に取り組むが、その学習が次の学習へ発展しなかったり、確かな学力として十分に定着しなかったりすることもある。

以上の点を踏まえ、本校第2学年の生徒を対象に国語科の学習に関する実態調査を行った。

(実施時期：平成27年6月 対象：本校 第2学年34人)



写真1 正門から見える校舎



写真2 授業を受ける生徒の様子

イ 国語科の学習に関する実態調査

国語科の学習についての質問のうち、「国語科の学習は大切だと思うか」、「国語科の学習は将来役に立つと思うか」という問いに肯定的に答えた生徒の割合はいずれも9割を超え、ほとんどの生徒が国語科の学習に重要性を感じていることが分かる。その反面、「国語科の学習を他教科等の学習に生かしている」と肯定的に答えた生徒の割合は約3割程度であったことから、国語科の学習が国語科の授業の中だけに留まっており、生きて働く国語の能力を育成するという国語科の役割が十分に果たせていない現状がうかがえる(図1)。

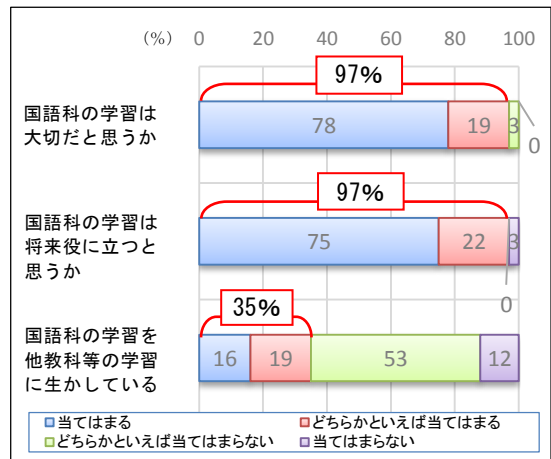


図1 国語科の学習に関する実態調査結果

ウ 国語科の課題解決的な学習に関する実態調査

国語科の課題解決的な学習についての質問項目では、「段落や話のまとめりごとに内容を理解しながら読んでいる」、「目的に応じて読み、自分の考えを話したり書いたりしている」と肯定的に答えた生徒はいずれも7割を超えた反面、「複数の資料を比較したり関連付けたりして読み、自分の考えをもつことができる」と答えた生徒は5割程度であり、国語科の授業が従来通りの、教材となるテキストの内容読解に終始したものに陥りやすいことがうかがえる(図2)。

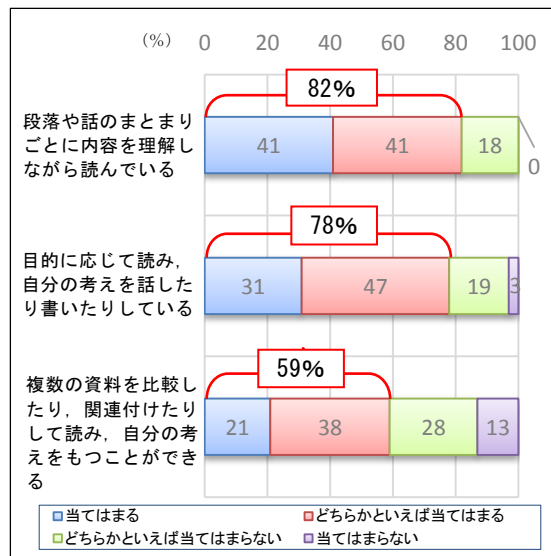


図2 課題解決的な学習に関する実態調査結果

エ 国語科の授業に関する実態調査

国語科の授業後に感じることや考えることについての質問項目では、「授業の内容はよく分かる」という項目に対して肯定的に答えた生徒の割合は約9割であったが、「学習後に何ができるようになったかを実感する」という項目に肯定的に答えた生徒の割合は2割程度であり、生徒の「分かる」と「できる」に意識のずれが見られた(図3)。

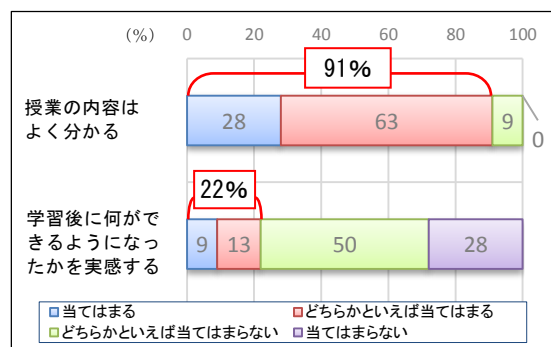


図3 国語科の授業に関する実態調査結果

(2) 教師に対する意識調査等の結果と分析

次に、本校の教科担当者を対象に、他教科との連携や各教科で実施する言語活動における課題等について聞き取りを行った結果から明らかになった課題について述べる(図4, 表1)。

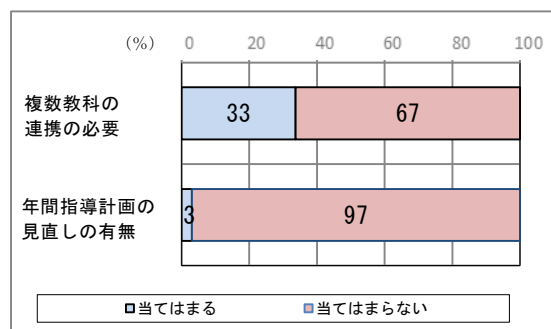


図4 教師に対する意識調査結果

表1 各教科で実施する言語活動とその課題

教科	言語活動の種類	言語活動における課題
社会科	様々な資料を適切に収集・選択・活用して社会的現象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する学習活動	・ 分かったことや伝えたいことを論理的に構成して説明することが苦手である。
数学科	言葉や数、式、図、表、グラフ等の数学的な表現を用いて論理的に考察し表現したり、その過程を振り返って考えを深めたりする学習活動	・ 目的や意図に応じて、自分の考えを説明することが苦手である。
理科	観察、実験の結果を分析し解釈する学習活動や科学的な概念を使用して考えたり説明したりするなどの学習活動	・ 目的や意図に応じて、自分の考えをまとめ、論理的に説明することが苦手である。
外国語科	実際に言語（外国語）を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの学習活動や、文法事項等の言語材料について理解したり練習したりする学習活動	・ 英語だけで言語活動を行うことが苦手である。
音楽科	音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、どのように音楽表現をしたいのかという思いや意図を言葉で表したり、音楽を聴いて価値などを考え、批評したりする学習活動	・ 語彙力が不足している。 ・ イメージ力が不足している。
技術・家庭科	衣食住やものづくりに関する様々な語彙の意味を、実感を伴って理解する学習活動や言葉・図表及び概念などを用いて考えたり、説明したりするなどの学習活動	・ 目的や意図に応じて、自分の考えをもつことが苦手である。
保健体育科	主に体を動かす活動を通して、コミュニケーションや感性・情緒に関する学習活動及び知的活動、健康・安全に関する知識を活用する学習活動	・ 語彙力が不足している。

（言語活動の種類については、『言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】』を基に作成）

「言語活動における課題」として、語彙力不足や自分の考えを説明する困難さを挙げる教員が多く、自分の考えを論理的に説明したり、文章にまとめたり、資料に基づいて説明したりするなどの、国語科でこれまでに学習してきた言語活動が、他教科の学習で発揮されていない現状がうかがえた。また、「複数の教科と連携して学習を行うことの必要性」に比べて、「国語科と連携した年間指導計画の見直しの有無」については消極的な考えが見られたことから、教科間で連携して学習を行うことの必要性は感じながらも、実際の行動にまでは至っておらず、教科間で連携して学習することの難しさが本校でも見られることが分かった（図4）。

一般的に見ても、中学校のような教科担任制の場合、各教科で連携して学習することは容易なことではない。そこで、国語科の役割である「実生活に生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力」を国語科が責任をもって育成し、その力が各教科等の学習の場で発揮されれば、各教科での言語活動も活性化するだけでなく、生徒自身も学習の成果を感じにくい国語科の学習の意味を見いだすことにもつながるのではないかと考える。

### (3) 調査結果等を基にした本研究の方向性

本校の現状や実態調査から、「何のために学習しているのか」という学習の目的を意識しないまま、与えられた課題を淡々とこなす生徒の姿が浮き彫りとなった。特に、単元終了と同時に学習に対する意識も途切れてしまう実態があることから、生徒を主体的に学習に取り組ませるためには、生徒に「各単元で何を学んだのか」、「何ができるようになったのか」を実感させ、国語科の学習に対する意識を途切れさせないようにすることが必要であると考えられる。

そこで、本研究を「学びの成果を実感しづらい国語科の学習を、実生活や各教科等の学習と関連付けたり、各教科等の言語活動で発揮される国語の能力を、国語科の指導事項に即した観点で見取ったりすることで、国語を学ぶ意義や価値を実感させ、主体的に学ぼうとする生徒の育成を目指した研究」とした。

## 2 研究主題に関する基本的な考え方

### (1) 「生徒の主体的な学びを引き出す」とは

本校生徒の実態を見ると、生徒自身が学習することの意義や価値について十分に理解し実感する機会が少ないことが、国語科の学習で学んだことを他教科等の学習や実生活に主体的に活用するまでに至らない現状を作っているように思われる。また、学習後の自己評価で、「授業の内容は分かった」と答える生徒は多いものの、「学習後に何ができるようになったかを実感する」と答える生徒が少ないところに、学びの成果を実感しづらい国語科の現状が見られる。それは、教師が国語科の学習を、単元あるいは教材の中だけで収束させてきたことが要因ではないかと考えられる。一般的に、国語科の授業は、単元ごとに教材の内容理解を求める学習課題を設定し、それを解決していくという学習が繰り返されることが多いように思われる。これでは生徒自らが、実生活での言語活動を振り返りながら自らの課題を見だし、主体的に課題解決（学習）に取り組む余地は生まれにくいと考える。

平成19年に改正された学校教育法第30条には、「学力の3要素」として「基礎的・基本的な知識・技能の習得」、「思考力・判断力・表現力等の育成」、「主体的に学習に取り組む態度」が示されている。「主体的」という語<sup>※1)</sup>は、「自分自身の意志や判断に基づいて行動を決定する様子」という意味であるが、「主体的な学び」には様々なアプローチがなされ、多くの実践が紹介されている。勝見<sup>※2)</sup> (2014) は「学習展開に必要性を伴わせることが、生徒の主体的な学びを引き出すには重要である」としている。国語科において、「切実感のある学習課題との出会い」、「課題を解決していくための学習過程の明確化」、「付けたい力に合う言語活動の設定」、「何ができるようになったかを実感させる適切な評価」を踏まえた「単元を貫く課題解決的な言語活動」を位置付けた学習の必要性は言うまでもないことである。

また、平成20年1月の中央教育審議会答申には、「国語科については、…（中略）…実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」に「重点を置いて内容の改善を図る」とある。そのため、国語科の学習が実生活で生かされることを念頭に置きながら、授業を行うことが必要である。しかし、「国語科の学習で取り組んできたことが、他教科の言語活動等で十分に発揮されているかどうかを見取る」という取組は、これまで行われていなかったように思われる。

国語科で学習したことが他の場面で生かされたとき、生徒は国語科での学習の必要性を感じ、主体的に学ぼうとするのではないかと考えられる。そのため、単元を構想する際に他教科等での言語活動を想定した学習を取り入れるとともに、他教科等での学習の成果物を国語科の観点で見取り、不十分な部分を次の国語科の単元構想に加えていくという形で連携を図ることにした。

そこで、国語科における「生徒の主体的な学びを引き出す」ことを「国語の学びを実感させ、

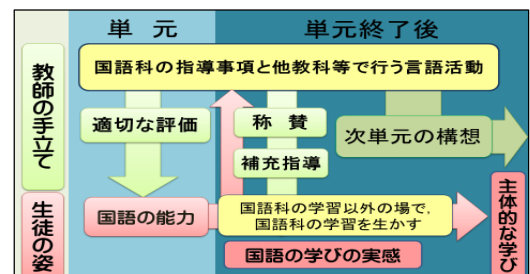


図5 主体的な学びを引き出す単元構想の考え方

※1) 『新明解国語辞典 第6版』

2008年 株式会社三省堂

※2) 勝見健史 『「活用」の授業で鍛える国語学力』

2014年 株式会社文溪堂



学習に対する意欲を持続させるため、他教科等との連携を図った単元を構想し、言語活動や評価の在り方を工夫することとした（図5）。

(2) 「国語科における他教科等との連携」とは

これまで、国語科の学習では、各教科での学習と実生活との関連を踏まえた実践等の取組は行われており、本校でも国語科の教材「一枚レポートを作ろう」と総合的な学習の時間の取組を関連させたり、「手紙文を書こう」と職場体験学習のお礼状を書くことを関連させたりするなどの「他教科等の学習内容と連携する」学習は行ってきた。また、「他教科等で学習したことを国語科の学習で書く」という取組も行っている。しかし、それは国語科の学習で身に付けた国語の能力を生かしているのではなく、同時期に学習内容を合わせて行ったに過ぎない。生徒を主体的な学びに向かわせるには、学んだことを実感し、できるようになったことを他の場で生かしてみようという経験をさせることが必要であり、そのためには、国語科の指導事項と他教科等で行われる言語活動とを関連させることが効果的なのではないかと考える。そこで、「国語科における他教科等との連携」を「国語科の指導事項と他教科等で行われる言語活動を関連させるとともに、単元を貫く課題解決的な言語活動を位置付けた単元を構想し、学習後、他教科等の言語活動を見取った結果を、補充指導や次単元の構想に生かすこと」とした。

また、『中学校学習指導要領解説 国語編』の指導計画と内容の取扱い「C 読むこと」の配慮事項には、「他教科等の学習との関連を図り、生徒が様々な文章を読んで、自分の表現に役立てる場面等も積極的に設定する必要がある」とある。そこで、研究の対象を説明的文章に絞り、学習の中で行われる言語活動と国語科の指導事項において関連する点が多い社会科や理科との連携を意識して研究を進めることとした。

3 生徒の主体的な学びを引き出す国語科学習指導の構想

(1) 他教科等との連携を図った単元構想と言語活動の意義

『学習指導要領 第1章総則』には、「各教科等の指導に当たっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、…（中略）…生徒の言語活動を充実すること。」とある。先述した中教審答申の「国語科の改善の基本方針」からこのことを考えると、国語科は、各教科等で行われる学習活動で発揮されるべき国語の能力を育成することが求められる教科であると言える。

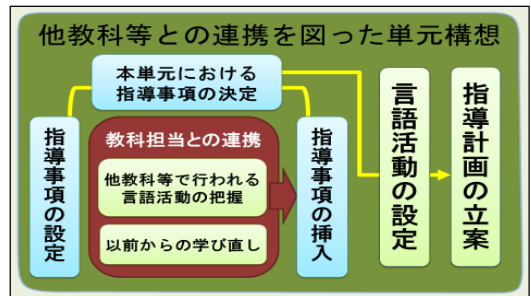


図6 他教科等との連携を図った単元構想の工夫

そこで、単元を構想する際に、国語科の指導事項に同時期に実施される他教科等の言語活動に必要な言語能力の育成という視点を加えて言語活動を設定する。授業実施後、他教科等で実施された言語活動の成果物を国語科の観点で見取り、その結果、定着不足の事項があれば、補充指導や次単元の指導事項に付け加えることで学び直しの機会を設ける。他教科等と連携を図った単元構想によって、国語科で培うべき力を確実に身に付けさせられるとともに、国語科の学習に対する意欲を持続させ、主体的な学びを引き出すことができるものとする。（図6）。

(2) 社会科や理科との連携を図った説明的文章における単元構想と言語活動の工夫

国語科第1学年の年間指導計画を見ると、説明的文章に関する教材は5教材あり、論説的文章の要素が強いものが2教材、説明的文章の要素が強いものは3教材設定されている。

表2 説明的文章の教材とその特徴

月	要素	教材名	教材の特徴
5月	説明	水田の仕組みを探る	段落構成、文章と図表との関連
10月	論説	この小さな地球の上で	もの見方・考え方、引用
11月	説明	信頼をつなぐ	例示の効果
11月	論説	ユニバーサルな心を目指して	語句の意味の捉え方、辞典
2月	説明	食感のオノマトペ	情報活用、文章と図表との関連

※教材 『中学生の国語一年』（三省堂）



例えば、5月の「水田の仕組みを探る」で学習した「文章と図表の関連」については、2月の「食感のオノマトペ」の学習まで扱わないことになる（表2）。しかし、該当する時期だけで指導を終えてしまえば、国語の能力の高まりは期待しにくい。国語科の学習を他教科等の学習で発揮したり、他教科等の学習での言語活動の中から課題を見いだしたりするような単元構想や言語活動の設定を工夫することにより、生徒の言語能力の螺旋的な高まりや主体的な国語科学習の展開が期待できるのではないかと考えた。

ここでは、第1学年で学習する説明的文章「水田の仕組みを探る」と「食感のオノマトペ」の2教材における社会科や理科との連携を図った単元構想と言語活動の工夫を例として、その手順（ア～カ）について述べる。

#### ア 教材「水田の仕組みを探る」の特性を踏まえた指導事項の決定

本教材は、「水田はどのように作られているのか」という問題提起から、水田の構造の科学性や水田が土を固めて作る三つの長所を説明することで、水田に込められた先人の知恵について述べている文章である。生徒にとって見慣れない用語は多いが、段落構成を工夫したり、図表を活用したりすることで読み解きやすい文章になっている。そのため、本教材では筆者の説明にはどのような工夫があるかを考えながら読んだり、図表も関連付けながら読むと内容が理解しやすくなることを学習したりすることができる。以上の点から、本教材の指導事項を、第1学年「C 読むこと」(1)「イ 文章の中心的部分と付加的部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること」とした。

#### イ 国語科による社会科や理科の年間指導計画の把握

次に、社会科や理科の年間指導計画や教科書教材を見て、国語科の学習内容が発揮される言語活動について把握する。

表3 社会科や理科と国語科の内容の共通点

社会科	国語科	理科
学習指導要領	学習指導要領	学習指導要領
【地理的分野】 3 内容の取扱い (2)ア 地理的な見方や考え方及び地図の読図や作図、景観写真の読み取りなど地理的技能を身に付けることができるよう系統性に留意して計画的に指導すること。その際、教科用図書「地図」を十分に活用すること。 また、地域に関する情報の収集、処理に当たっては、(省略)。 (3)エ 様々な資料を的確に読み取ったり、地図を有効に活用して事象を説明したりするなどの作業的な学習活動を取り入れること。また、自分の解釈を加えて論述したり、意見交換したりするなどの学習活動を充実させること。	「C読むこと」 (2) 内容 ① 指導事項 イ 文章の中心的部分と付加的部分、事実と意見などを読み分け、目的に応じて要約したり要旨をとらえたりすること。	【第2分野】 2 内容 (1) 植物の生活と種類 ウ 植物の仲間 (7) 種子植物の仲間 花や葉、茎、根の観察記録に基づいて、それらを相互に関連付けて考察し、植物が体のつくりの特徴に基づいて分類できることを見いだすとともに、植物の種類を知る方法を身に付けること。

各教科の学習指導要領を見ると、表3に示すように、社会科では「様々な資料を的確に読み取ったり、地図を有効に活用して事象を説明したりする」学習が、理科では「観察記録に基づいて、それらを相互に関連付けて考察」する学習が行われる。社会科の学習では、説明する内容と資料とを対応させたり、論の中心と例示を読み分けたりする力が必要となることが予想される。これらの力は、「手順ア」で設定した国語科の指導事項で身に付けるべき力と共通している。以上の点から、本単元の学習と社会科の学習を関連付けて行うことは可能であり、むしろ効果的ではないかと思われる。

#### ウ 社会科と連携を図った国語科の言語活動の設定

社会科では第1学年の3学期に、地理的分野の学習で「世界の様々な地域」について学習することが計画されており、「人々の生活の様子やその変容に関する資料から分かることと、自然及び社会的条件と関連付けて考察し、分かりやすく説明する」という学習内容が設定さ

れている。この学習では、「資料を読み取る力」、「事実と資料を関連付ける力」、「情報を選択し整理する力」が必要となる。これらの力は、国語科第1学年の指導事項「C 読むこと」(1)「イ 文章の中心的部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をまとめたりすること」で身に付けるべき力と関連しており、国語科が本教材を指導するにあたり、元々設定していた指導事項と共通していた。

以上の点から、身に付けた国語の力が発揮される場として社会科や理科と連携を図ることとし、国語科で実施する言語活動を図7のように設定した。

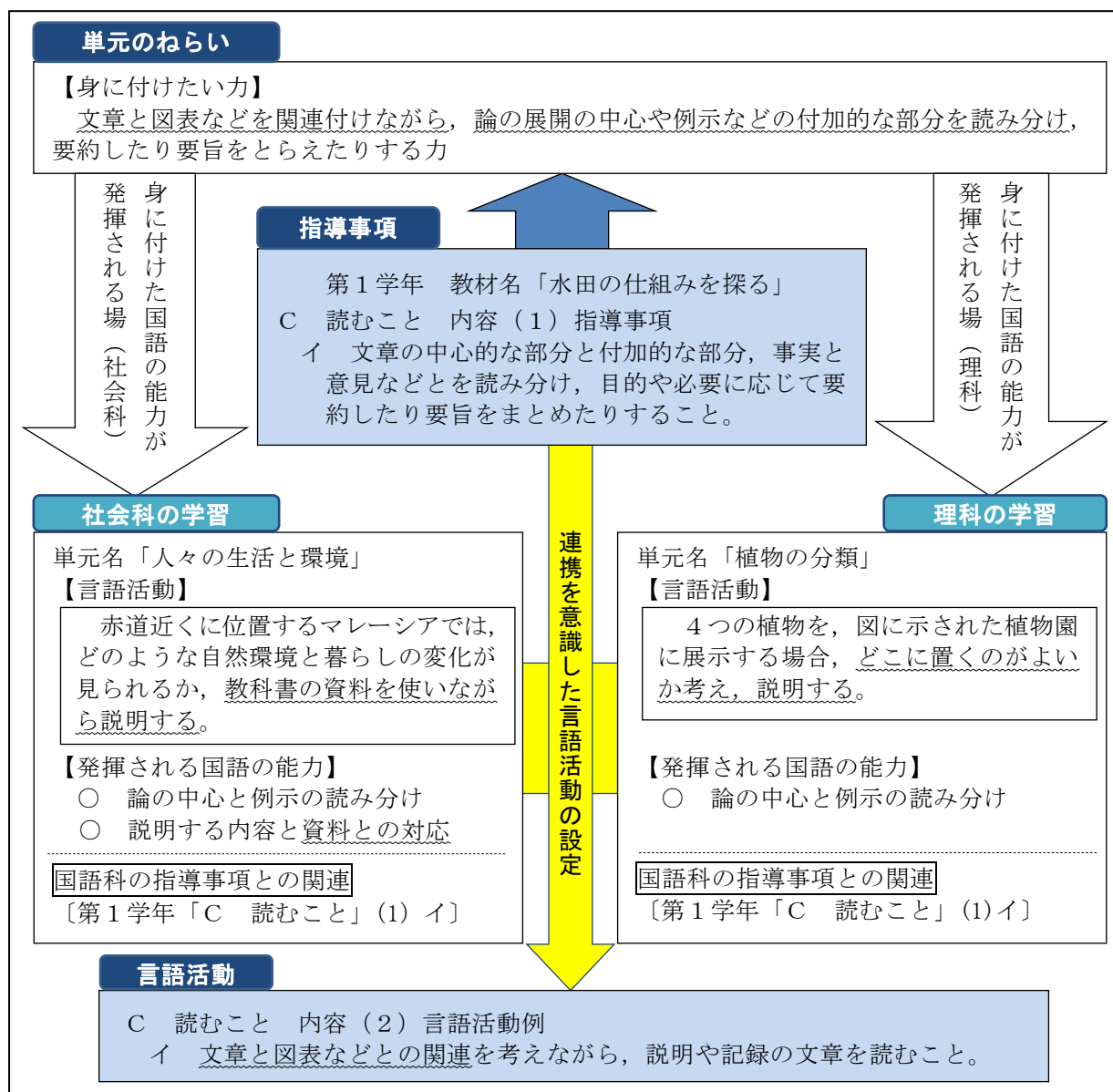


図7 社会科や理科の学習と国語科の指導事項との関連と言語活動の設定

エ 単元を貫く課題解決的な言語活動を位置付けた指導計画の工夫

社会科や理科と連携し、国語科における言語活動を設定することができたら、次は、単元を貫く課題解決的な言語活動を位置付けた指導計画を作成することになる。本単元では、文章の展開と図表の使われ方などに気を付けて読むと文章の内容が理解しやすくなることを学習することで、文章と図表などとの関連を理解し、複数提示された図表から文章に付け加えるとよい図表を選び出し、その理由を交流するという言語活動を行う。この学習により、社会科の「資料と自然及び社会的条件と関連付けて考察する」、理科の「観察記録に基づいて、それらを相互に関連付けて考察」という言語活動の解決にも生かされるものと思われる。

## オ 社会科や理科で実施される言語活動を国語科の観点で見取る評価の在り方

身に付けた国語の能力が発揮される場として連携を図った社会科や理科の学習で生徒が書いた表現を、単元構想の際に関連させた国語科の指導事項に基づいて設定した評価の観点で見取りを行う。ここでは、社会科の学習の見取りについて詳述する。

例えば、**図 8**に示したように、「社会的事象を資料に基づき、考察したことを説明する」言語活動に対して、国語科第1学年の指導事項「C 読むこと」(1)「イ 文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をまとめたりすること」を踏まえ、見取りの観点を「① 説明する内容と資料との対応」、「② 論の中心と例示の読み分け」と設定する。この観点に基づいて見取りを行うが、その後の補充指導も考慮し、見取りの方法や内容については教科担当と十分に連携する必要がある。

## カ 見取り後の手立て

見取り後に行う手立てとして「(ア) 国語科の授業中に補充指導を行う」ことや「(イ) 次単元の指導事項に加え、学び直しの機会を作る」ことが考えられる。(ア)では社会科のレポート等を国語科の学習で学んだことを基に見直しをさせる。そして「① 文章や図表との関連」、「② 目的や必要に応じた要約や要旨の取り方」の観点で、文章の書き方について指導を行う。(イ)では、学級の定着状況を踏まえながら、主たる指導事項に加え、補充的な指導の機会として設定し、確実に定着できるようにする。流れをまとめると**図 8**のようになる。

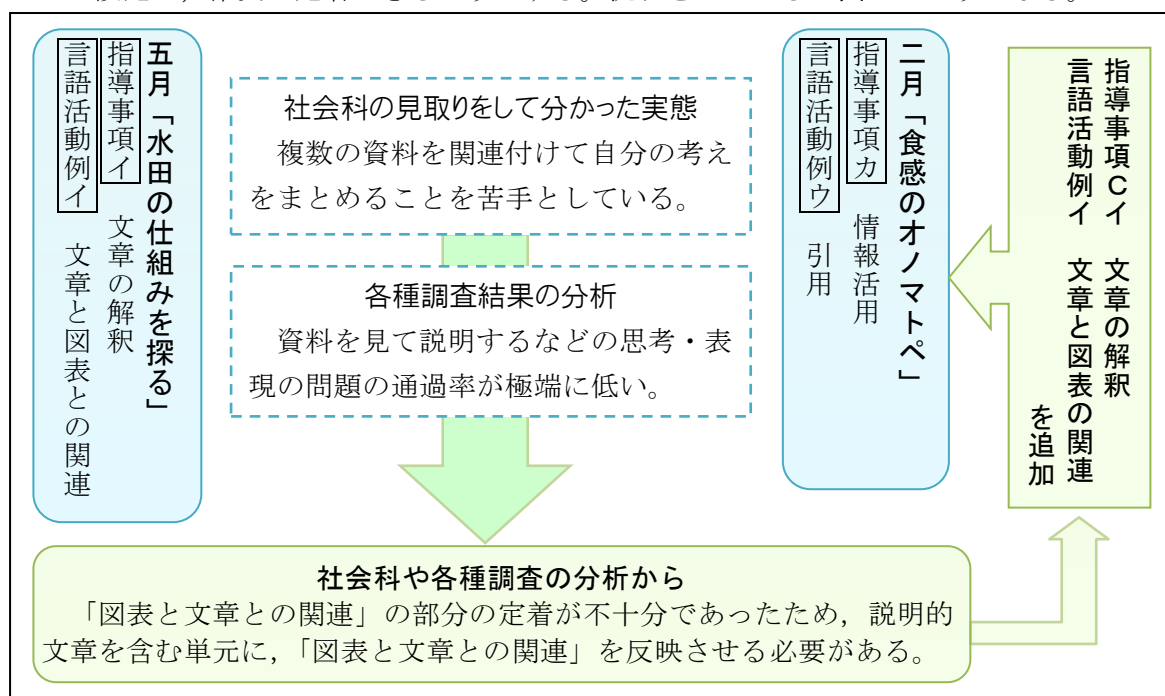


図 8 社会科で行われた言語活動の見取り後の手立て

第1学年の2月に実施する「食感のオノマトペ」の学習後、説明的文章を学ぶ機会は第2学年の7月頃の「壁に残された伝言」となる。その間、実施される各種調査や社会科や理科の言語活動を見取り、定着が不十分な点は補充指導をしたり、他の単元に再度加えて学び直す機会を設けたりすることは可能である。『中学校学習指導要領解説 国語編』の指導計画と内容の取扱いにおいても、各学年の内容にある指導事項や言語活動については、その学年だけで指導を終えるのではなく、生徒の言語能力が螺旋的に高まるよう、生徒の言語能力や言語体験の実態を踏まえた指導計画の工夫の重要性が述べられている。教師の具体的な手立てにより「食感のオノマトペ」で学んだ学習内容が他の場で生かされることを実感する機会が増えれば、生徒は主体的に学ぶようになるだろうと考える。

#### 4 検証授業 I の実施と考察

##### (1) 検証授業 I の概要

単元名	戦後70年を迎えた思いを意見文としてまとめよう（「壁に残された伝言」）
実施学年	志布志市立松山中学校 第2学年1組 男子24人 女子10人 計34人
実施時期	平成27年7月1日～10日

##### (2) 検証授業 I のねらい

- ア 社会科や理科との連携を図った単元構想や言語活動の設定の仕方について明らかにする。
- イ 社会科や理科で実施される言語活動を見取る方法について明らかにする。
- ウ 社会科や理科との連携を図った学習活動が生徒の主体的な学びを引き出すことにつながるかどうかを明らかにする。

##### (3) 検証授業 I の単元構想と言語活動の工夫

###### ア 本教材の特徴と主たる指導事項

本教材は、1945年8月6日の原爆投下直後、救護所として利用していた小学校校舎の建て替え工事中に偶然発見された「被爆の伝言」が白黒逆転して残った事実と「伝言」が意味することを、前半は説明的文章、後半はルポタージュ風の形式で書かれた文章である。この文章を学習することで、「伝言」が奇跡的に残った事実と筆者自身の思いを書き分けるために、筆者が段落構成や叙述の順序をどのように工夫しているかを考えさせることができる。また、筆者は取材した多くのことから、自分の主張に合う具体例として「被爆の伝言」を選択したという点に気付かせることで「例示の効果」について理解させることも可能である。そのため、本教材の指導事項を、第2学年「C 読むこと」(1)「イ 文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること」とした。

###### イ 前単元の学び直しと社会科や理科との連携を図った言語活動の設定

前単元では、筆者が資料や調査結果をどのように分析したのかを考えた後、資料を活用しながら自分の考えを整理し、新聞記事の形式にまとめるという学習を行った。さらに、前単元の振り返りや各種調査結果の分析により定着が不十分であると思われる「文章と図表との関連」を指導事項に加え、図表から分かることと文章の内容を比較するという学習も行った。しかし、その後実施された平成27年度標準学力検査で、他教科において図表の読み取りが十分でないという結果が見られたため、今後の単元で、第1学年「C 読むこと」(1)「イ 文章の中心的部分と付加的部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること」、(2)「イ 文章と図表などとの関連を考えながら、説明や記録の文章を読むこと」の学び直しの機会をもちたいと考えていた。

また、本校の各教科の年間指導計画を見ると、社会科では、「少子高齢化という社会的事象を資料に基づき、考察したことを説明する」という学習が、理科では「実験の結果を分析し、解釈する」という学習がそれぞれ設定されていることが分かる。これらの学習を行うには「自分の論の根拠となる資料を選択する力」、「選択した資料を例に叙述を整理する力」が必要になる。これらの力は、国語科第2学年の指導事項「C 読むこと」(1)「イ 文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること」で身に付けるべき力と、第1学年「C 読むこと」(1)「イ 文章の中心的部分と付加的部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること」で身に付けるべき力と関連が見られる。

以上の点から、本単元に1年次の学び直しの指導事項を加えるとともに、身に付けた国語の力が発揮される場として社会科や理科と連携を図ることとし、国語科の言語活動を図9のように設定した。

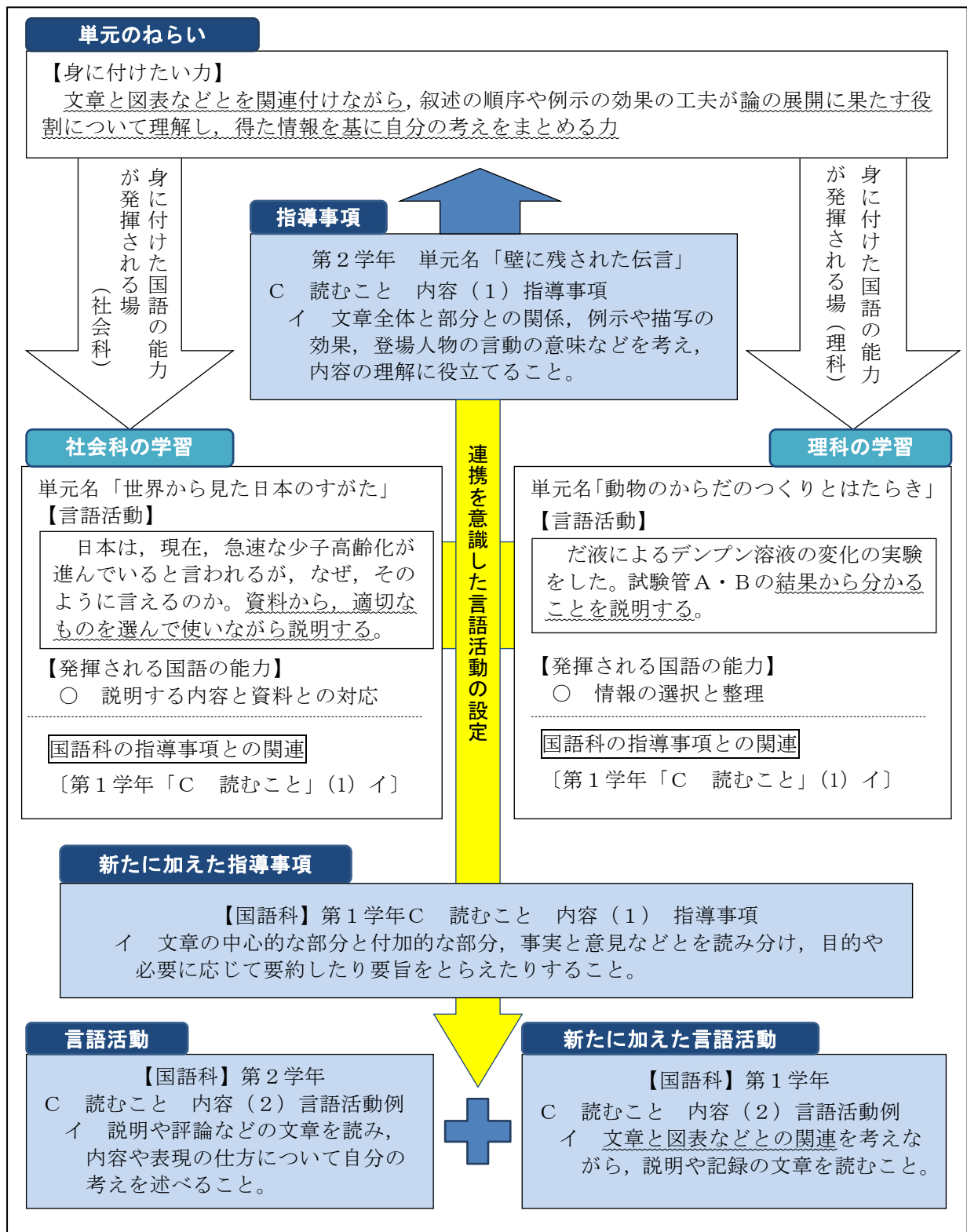
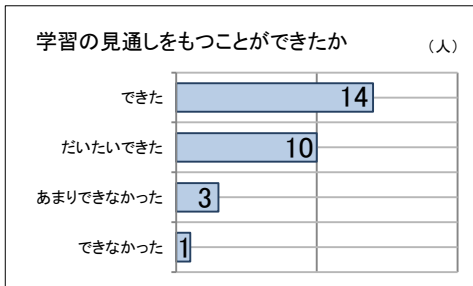
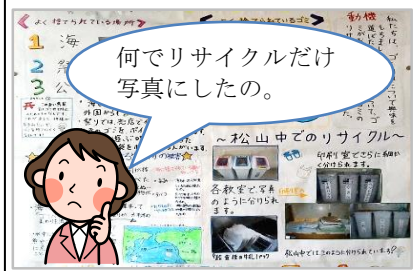
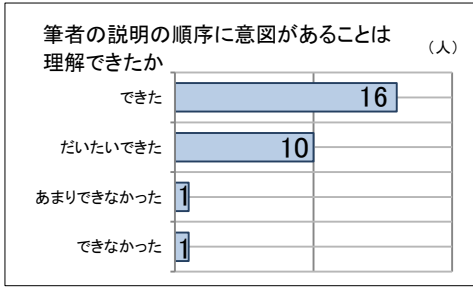
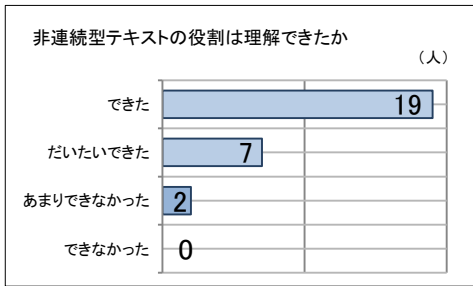
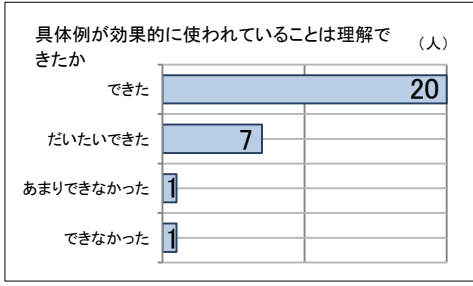



図9 社会科や理科の学習と国語科の指導事項との関連と言語活動の設定

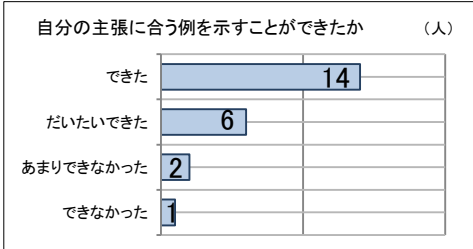

本単元では、前時の単元で意見文の書き方を学習していることも踏まえて、「戦後70年を迎えて思うこと」をテーマに具体例を挙げて簡単な意見文を書くことを「単元を貫く課題解決的な言語活動」と設定し、取り組ませることにした。この言語活動を設定することによって、例示が筆者の論を構成するのにどのような役割を果たすのか、そこには筆者のどのような意図があるのかを学ぶとともに、その学びを参考にしてよりよい意見文を書くことが可能となる。そして、この学習は今後、具体例を挙げて自分の論を展開させていく様々な取組につながるものと考えられる。



(4) 検証授業 I の実際

	主な学習活動と生徒の自己評価	授業の様子や指導の留意点																								
第一 次 1 ／ 6	<p>1 これまでに学習した「壁新聞作成」、「意見文の書き方」、「他教科の学習」についてスライドを見ながら振り返る。</p> <p>2 学習の見通しをもち、学習課題や活動について理解する。</p>  <table border="1"> <caption>学習の見通しをもつことができたか (人)</caption> <tr><td>できた</td><td>14</td></tr> <tr><td>だいたいできた</td><td>10</td></tr> <tr><td>あまりできなかった</td><td>3</td></tr> <tr><td>できなかった</td><td>1</td></tr> </table>	できた	14	だいたいできた	10	あまりできなかった	3	できなかった	1	 <p>図10 壁新聞の見取り(スライド)</p>																
できた	14																									
だいたいできた	10																									
あまりできなかった	3																									
できなかった	1																									
第 二 次 2 ・ 3 ・ 4 ／ 6	<p>3 全文を通読する。</p> <p>4 段落構成をつかみながら、筆者の説明の順序に意図があることを理解する。</p>  <table border="1"> <caption>筆者の説明の順序に意図があることは理解できたか (人)</caption> <tr><td>できた</td><td>16</td></tr> <tr><td>だいたいできた</td><td>10</td></tr> <tr><td>あまりできなかった</td><td>1</td></tr> <tr><td>できなかった</td><td>1</td></tr> </table> <p>5 前半部分を読み、白黒逆転した順序が示された四つのパーツを時系列に並べ直し、伝言が残った経緯について考える。</p>  <table border="1"> <caption>非連続型テキストの役割は理解できたか (人)</caption> <tr><td>できた</td><td>19</td></tr> <tr><td>だいたいできた</td><td>7</td></tr> <tr><td>あまりできなかった</td><td>2</td></tr> <tr><td>できなかった</td><td>0</td></tr> </table> <p>6 後半部分を読み、筆者が伝えたかったことと、伝言がどのような役割を果たしているかを理解する。</p>  <table border="1"> <caption>具体例が効果的に使われていることは理解できたか (人)</caption> <tr><td>できた</td><td>20</td></tr> <tr><td>だいたいできた</td><td>7</td></tr> <tr><td>あまりできなかった</td><td>1</td></tr> <tr><td>できなかった</td><td>1</td></tr> </table>	できた	16	だいたいできた	10	あまりできなかった	1	できなかった	1	できた	19	だいたいできた	7	あまりできなかった	2	できなかった	0	できた	20	だいたいできた	7	あまりできなかった	1	できなかった	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>次時の学習において、図表の有無で文章の分かりやすさが大きく異なることを生徒に理解させるために、あえて図表なしの教材文を準備し、生徒に配布する。</li> <li>並べ直す作業により、文章のどの部分が図になっているのかを探索させる。</li> <li>図では表現できない部分、図でしか説明されていない部分があるため、両方読まなくてはならないことに気付かせたい。</li> </ul>
できた	16																									
だいたいできた	10																									
あまりできなかった	1																									
できなかった	1																									
できた	19																									
だいたいできた	7																									
あまりできなかった	2																									
できなかった	0																									
できた	20																									
だいたいできた	7																									
あまりできなかった	1																									
できなかった	1																									
		 <p>写真3 学び合いの様子</p>																								



第 三 次 5 ・ 6 / 6	7 「戦後70年を迎えて思うこと」というテーマで 意見文を書く。		 <p>写真4 意見文を書く様子</p>
	8 意見文を読み合い、意見を交流する。		<ul style="list-style-type: none"> <li>交流の視点に沿って、交流させる。</li> <li>スライドで、他教科等の学習との関連も踏まえて、学習してきたことを振り返らせる。</li> </ul>
	9 学習したことを振り返る。		

(5) 本単元における評価と社会科や理科との連携

ア 国語科の評価

毎時間の生徒による自己評価やワークシートの状況から、生徒一人一人の学習の定着状況を把握し、補充指導をするとともに、第三次で書かせた意見文を鹿児島県総合教育センターが提案している「判断基準」を基に、評価を行った。


表4 意見文の「判断基準」

尺度	判断基準
B	ア 主張を整理し、 <b>頭活型</b> 、 <b>尾活型</b> 、 <b>双括型</b> を意識して書いている。 イ 自分の主張に合わせて、 <b>例を示している</b> 。 ウ 例に合った <b>非連続型テキスト</b> を選んでいる。
A	○ 論の展開に合う型を選び、段落の構成を工夫している。 ○ 自分の主張に合う例を示しながら、自分なりの考えを論じている。 ○ 論と非連続型テキストの種類の関連を意識して選んでいる。
C状況の生徒への補充指導	○ 戦争に関する内容を一つに絞り込ませる。 ○ モデル文を提示し、形式を確認させる。
B状況の生徒への深化指導	○ 自分の主張に合う型について再度検討させる。 ○ 自分の主張を整理するように助言し、意見文に活用させる。

原爆の種類	プルトニウム 235
被爆時の人口	約 35 万人
直後入市した人…被爆	7 万 8900 人
被爆後 3 ヶ月での死者	13 万人
被爆後 5 年間での死者	約 20 万人
原爆の種類	プルトニウム 239
被爆時の人口	約 27 万人
直後入市した人…被爆	3 万 4000 人
被爆後 3 ヶ月での死者	7 万人
被爆後 5 年間での死者	約 14 万人

参考文献

グラフィックワイド歴史  
 広島・長崎の原爆の被害



**【判断の要素】**  
ア 主張

結論を述べている。  
主張を整理し、最初に

**【判断の要素】**  
イ 例示

人の命を大切にしない戦争をしてはいけないという主張を具体化するために、広島や長崎に投下された原子爆弾を例に挙げている。

**【判断の要素】**  
ウ 非連続型テキスト

広島や長崎に投下された原子爆弾によって亡くなった人の人数等が書かれた表を選んでいる。

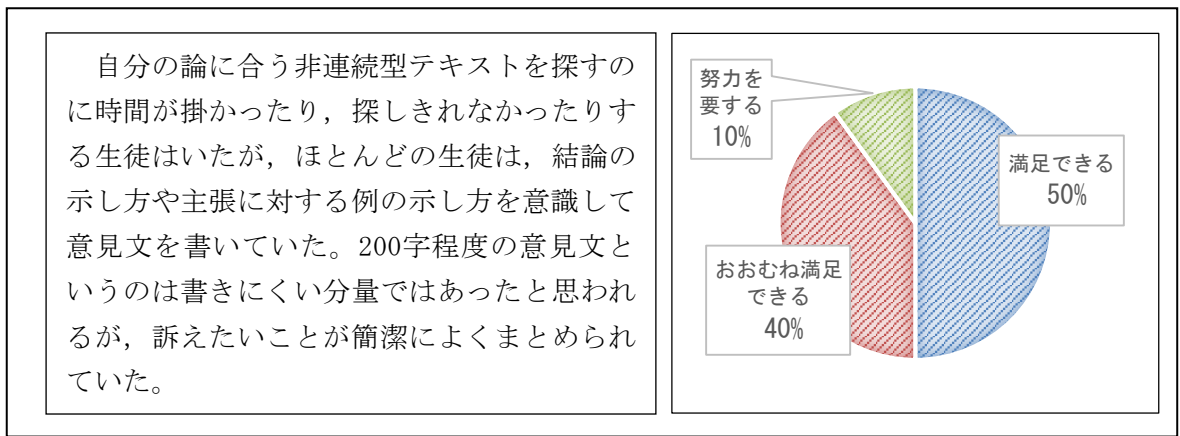


図11 意見文の評価

イ 社会科や理科の言語活動の見取り

(ア) 社会科の言語活動の見取り

単元終了後に、社会科で実施された言語活動の見取りを行った。

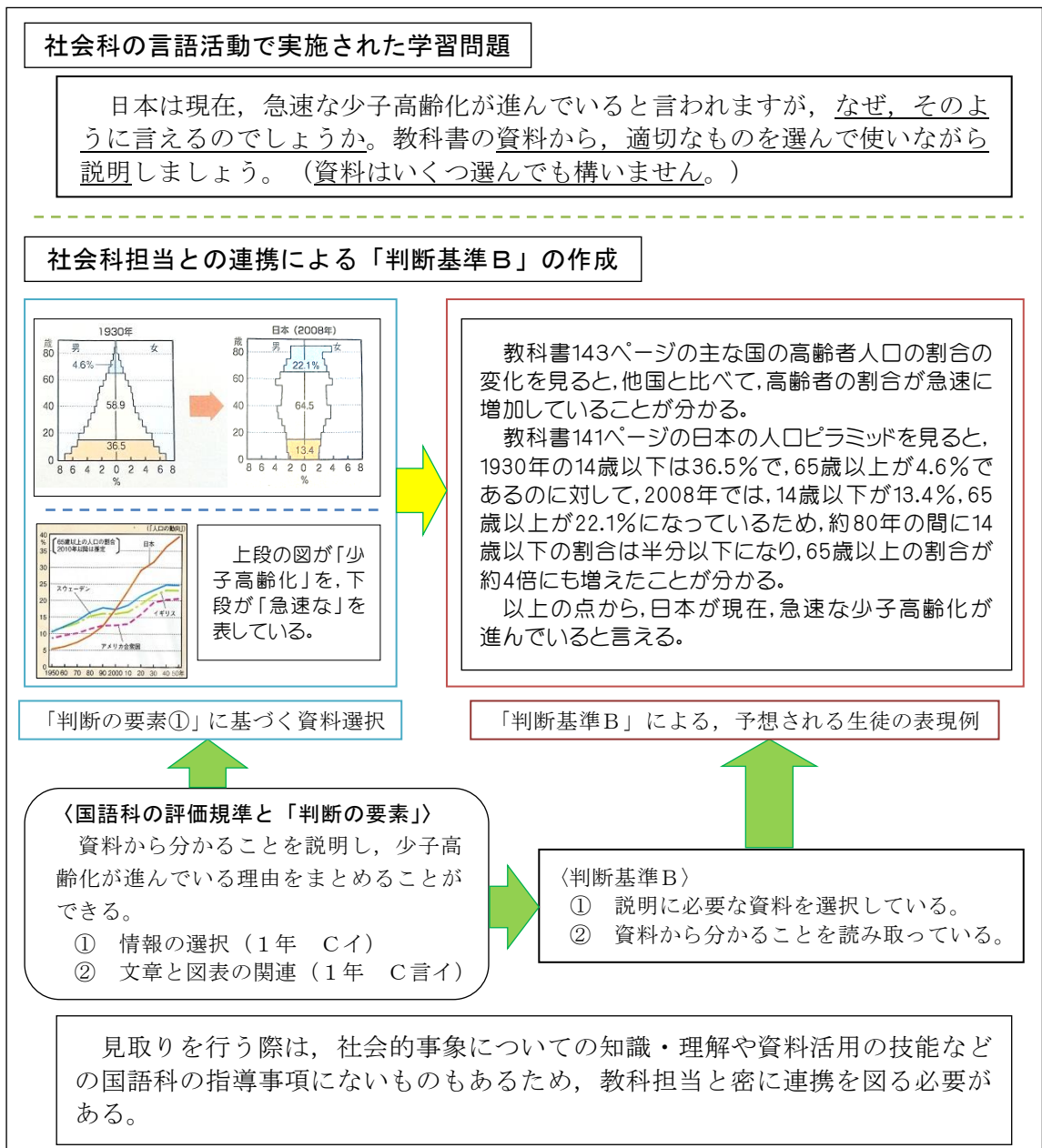


図12 社会科で実施された言語活動の見取り(「判断基準」設定の例)

(イ) 理科の言語活動の見取り

単元終了後に、理科で実施された言語活動の見取りを行った。

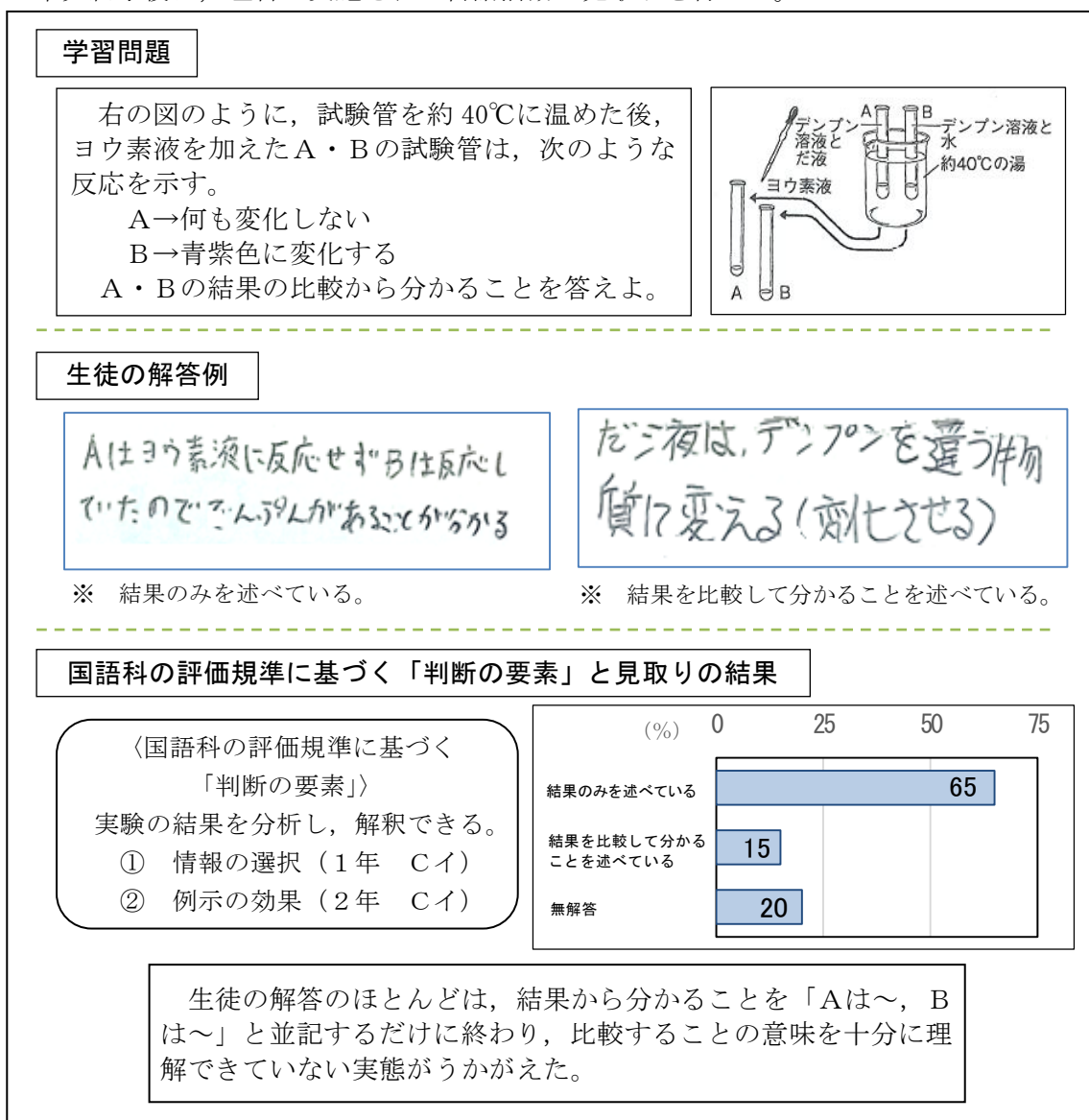


図13 理科で実施された言語活動の見取り (見取りにより分かった生徒の実態)

(ウ) 社会科や理科の見取りにより分かった生徒の実態

社会科の学習では、約9割の生徒が、多くの図表から急速な少子高齢化が進んでいることが分かる資料を選択し、資料を例に叙述することができた。しかし、理科の学習では、複数に及ぶ実験の結果を比較して分かることを叙述する学習が行われたが、多くの生徒が実験の結果を叙述するに留まり、比較して分かることを叙述できた生徒は全体の約1割に留まった。この「複数の情報を比較して分かることを説明する」という学習は、多くの教科の学習場面で行われるものであり、この力は国語科が身に付けさせるべき言語能力でもある。丁寧に指導する必要があると感じた。

(6) 検証授業Ⅰの成果と課題

ア 成果

(ア) 社会科や理科との連携を図った単元構想により設定した「非連続型テキストを添付した意見文」を書くという言語活動を単元を貫いて取り組むことで、説明的文章に見られた内容読解に偏った授業を脱却することができた。

- (イ) 社会科や理科との連携を図って単元を構想することで、国語科だけでなく、社会科や理科の学習場面において、生徒に「自ら説明する内容と資料との対応」を意識させることができ、1年次からの定着が不十分だった「文章と図表の関連」について定着させることができた。
- (ウ) 69%の生徒に国語科の学習が他教科等の学習に生かされるという意識をもたせることができた(図14)。

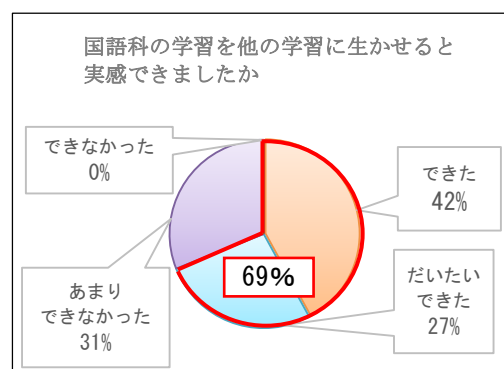


図14 授業後の生徒の意識調査結果

#### イ 課題

- (ア) 学習の見通しや学習課題の提示が生徒に分かりやすいものではなかった。
- (イ) 学習活動が多かったため、一人でじっくり考える時間を十分に確保できなかった。
- (ウ) 他教科の言語活動を見取り、その後の指導に活用する手立てが不十分であった。
- (7) 検証授業Ⅰの課題を踏まえた指導法の改善

上記に示した課題を踏まえ、検証授業Ⅱは次の3点を留意して実施したい。

まず、生徒にとって学習の見通しがもちにくいものになってしまった一番の原因は、学習の見通しをもたせるための情報量が多すぎたために、生徒がこの単元で何を学ぶのかが分かりにくくなったからではないかと考える。そこで、課題の(ア)については、社会科や理科で実施される言語活動を国語科の単元構想や言語活動に確実に関連付け、生徒が切実感や必要感をもち、主体的に学習に取り組む学習課題の提示や見通しのもたせ方について検証したい。

次に、本来、国語科が達成すべき指導事項に社会科や理科との関連や前単元の学び直しという点加わるため、学習活動が多くなってしまったことが、説明的文章を熟読したり、じっくりと一人で考える時間を確保したりすることができない原因となったと感じている。それは、学習活動の一つ一つが独立してしまい、関連させられなかったからではないかと考える。そこで課題の(イ)については、社会科や理科の言語活動を国語科の単元構想や言語活動に適切に関連付ける方法について検証をしたい。

そして、社会科や理科で実施された言語活動を見取った後の補充指導等が不十分であったことが、31%の生徒に他教科の学習に生かせると実感させられなかった原因であると考えられる。そこで、課題(ウ)については、生徒が自己の言語能力の高まりを実感できる評価の在り方や他教科の学習の見取りの方法とその後の手立てについて検証したい。

## 5 検証授業Ⅱの実施と考察

### (1) 検証授業Ⅱの概要

単元名	壁新聞を作成するための「虎の巻」を作ろう(「循環型社会とは何か」)
実施学年	志布志市立松山中学校 第2学年1組 男子24人 女子9人 計33人
実施時期	平成27年11月1日～9日

### (2) 検証授業Ⅱのねらい

ア	社会科や理科の言語活動を国語科の単元構想や言語活動に適切に関連付ける方法について検証する。
イ	生徒が必要感、切実感をもち、主体的に取り組む学習課題の提示等について検証する。
ウ	生徒が自己の言語能力の高まりを実感できる評価の在り方と他教科の学習の見取りとその手立てについて検証する。

### (3) 検証授業Ⅱの単元構想と言語活動の工夫

## ア 前單元からのつながり

前單元では、非連続型テキスト添付型の意見文を書くために、筆者が段落構成や叙述の順序をどのように工夫しているかを読み解くとともに、自らの論に説得力をもたせるため、何を例にもってきて、どのように例示しているかを考える学習を行った。その結果、「文章と図表の関連」については、生徒の自己評価や国語科の観点で見取った社会科の言語活動を見ても、概ね達成できたと判断した。しかし、理科で実施された言語活動の見取りを行った際、「複数のデータを比較して自分の考えを述べる」力は不足していることが分かった。各種調査を見ても、「複数の資料を比較して自分の考えをまとめる」問いの通過率は低い傾向にある。そこで本單元では、「複数の資料の比較」という視点をもって単元を構想したいと考えた。

また、検証授業Ⅰで、国語科の学習で身に付けた国語の能力を他教科等の学習で生かすという意識が低い生徒がまだ多かったため、今回の学習は、国語科の授業の中で読解した内容を自分の表現に適用させるような言語活動を実施したいと考えた。

## イ 本教材の特徴と主たる指導事項

本教材は、環境保全のために個人の取組はもちろんのこと、社会そのものを循環型社会へ移行し、社会全体で考える態勢を作る必要があると訴える内容である。文章は2つの話題から成り、それぞれ問題提起を示した後、個人と社会のそれぞれの取組について具体例を挙げながら、主張を述べるという流れになっている。

以上の点を踏まえ、本教材では第2学年「C 読むこと」(1)「ウ 文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること」を主たる指導事項として設定した。

## ウ 社会科や理科との連携を図った単元構想の工夫と言語活動の設定

### (ア) 社会科や理科との連携を図ることで必要となった指導事項

本單元と同時期に、社会科では、「複数の資料を見て、鹿児島県で起こりやすいと予想される災害について説明する」学習が、理科では、「生活の中で電気エネルギーの消費を抑えるための工夫について説明する」学習がそれぞれ行われる。これらの学習では、「複数の資料を比較して自分の考えをもつ力」、「知識や体験と関連付けて、考えを形成する力」、「話の中心と例示を読み分ける力」が必要となる。これらの力は、国語科第1学年の指導事項「C読むこと」(1)「イ 文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分け、目的や必要に応じて要約したり要旨をとらえたりすること」と関連が見られる。以上の点から、身に付けた国語の力が発揮される場として社会科や理科と連携を図るためには、主たる指導事項に新たな指導事項を加える必要が出てきた。

### (イ) 新たな指導事項を学ばせるために効果的な言語活動の設定

本校では、地域の良さを学ぶという観点から、1年次の総合的な学習の時間に「環境学習」を位置付け、まとめに環境壁新聞を作成している。実際に取り組んでみると、慣れ親しんだ地域で、普段からゴミの分別を行っているにも関わらず、生徒は本市の環境に関する取組に興味・関心が低く、知識も乏しいことが分かった。また、新聞にまとめるにしても、情報収集の仕方や記事のまとめ方が分からなかったり、調べたことをどのようにまとめればいいのか分からなかったりするため、作業が進まないといった状況も見受けられた。それは、情報収集の方法や得た情報から自分の考えをまとめるという力が欠如しているからではないかと考える。これらの力は、全ての教科で行われる言語活動に必要な国語の能力であり、国語科として身に付けさせるべき力である。

また、壁新聞の形式は本教材の段落構成や論の進め方と共通した点があり、学んだことを壁新聞の形式に適用しやすい構成となっており、国語科で学習したことを生かすという



経験をするには最適な教材と言える。さらに、実際に体験した壁新聞作成に関する活動は、生徒にとって切実感や必要感をもって課題解決にあたることができるものであり、同時に実生活に生きて働く国語の能力を育成することもできる。

以上の点から、身に付けた国語の能力が発揮される場として社会科や理科と連携を図ることとし、国語科の言語活動を図15のように設定した。

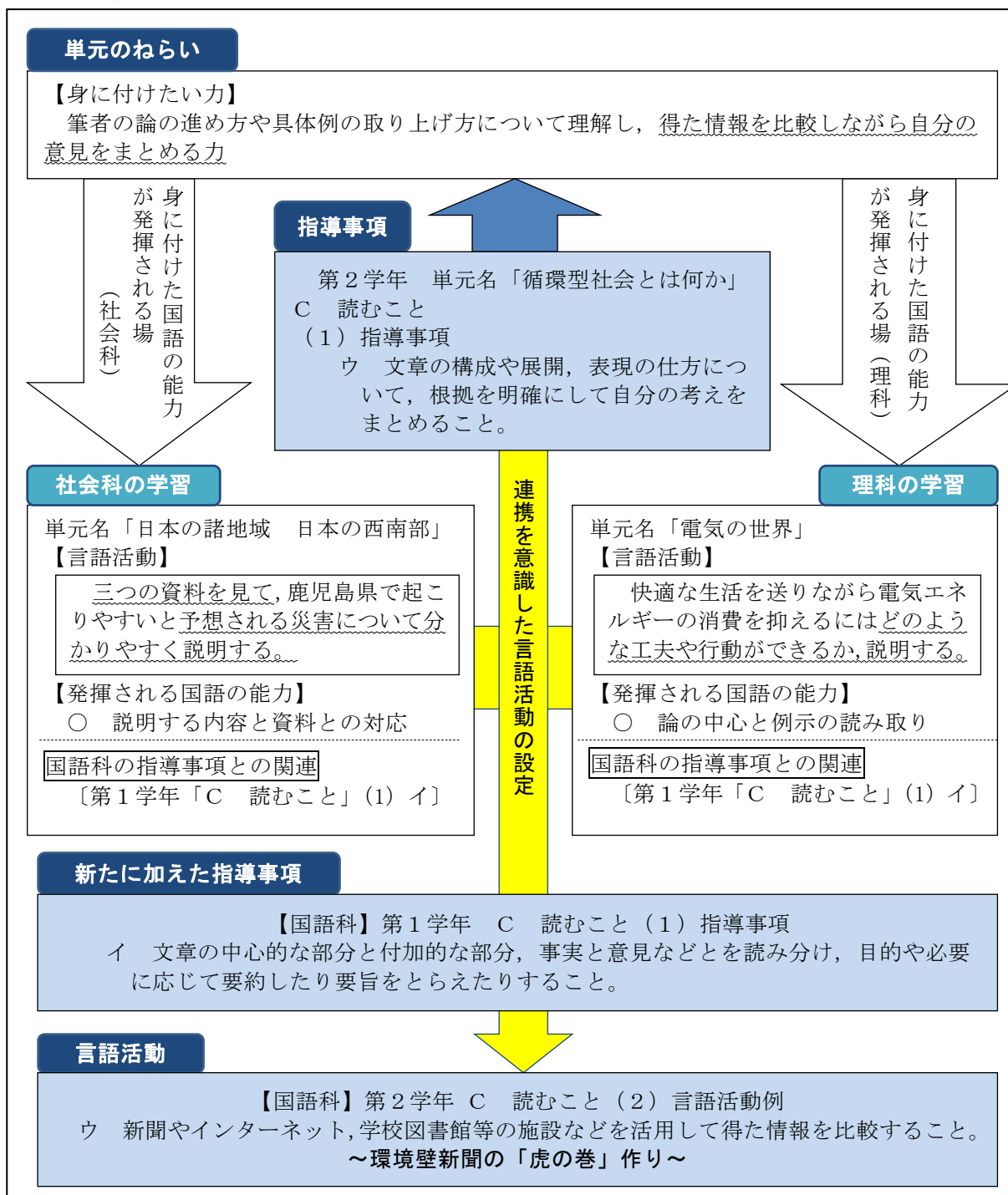


図15 社会科や理科の学習と国語科の指導事項との関連及び言語活動の設定


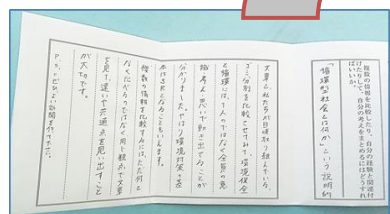
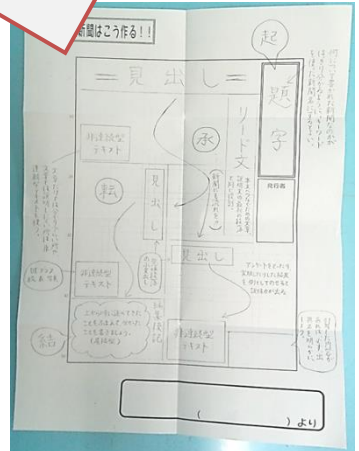
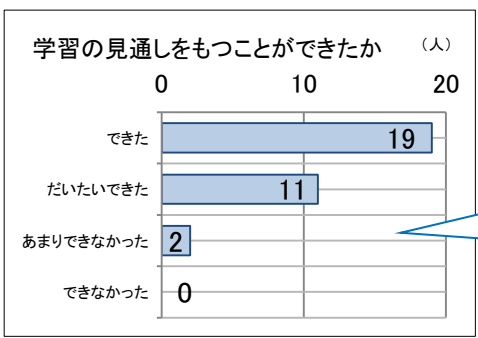
ここでは、先輩として環境壁新聞の作り方を後輩に伝授することを「単元を貫く課題解決的な言語活動」としたい。具体的には、1年生にアドバイスをしようと投げかけることで相手意識や目的意識を高めさせる。そして、文章における論の進め方や表現上の工夫を考えさせる。次に、志布志市の環境政策についての資料を読ませ、自分自身の日頃の取組と筆者の論と関連付けて、新たな自分の考えをまとめさせる。単元構想を図16のようにまとめた。





図16 国語科単独の単元構想と他教科との連携の視点を加えた単元構想の比較

(4) 検証授業Ⅱの実際

過程	主な学習活動	指導上の留意点								
第 一 次	1 「社会科や理科の学習」, 「壁新聞」を見て, これまでの学習を振り返る。  写真5 スライドで説明する様子 2 教材の学習課題と活動について理解する。 (学習課題) 筆者の論の進め方について自分の考えをもとう。 (学習活動) 「虎の巻」を作って, 壁新聞の作り方を1年生に伝授する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>スライドで示しながら, 学習の見通しをもたせる。</li> <li>他教科等の学習に生かすということは, 習ったことをそのまま使うのではなく, 適用させるという視点が重要であることも理解させる。</li> <li>単元を貫く課題解決的な言語活動として「いい壁新聞を作るための秘策を1年生に紹介する」こととし, そのための「虎の巻」を作って, 届けることを伝え, 相手意識や目的意識をもたせる。</li> <li>台紙を提示して, 「虎の巻」の形式をイメージさせる。</li> </ul>								
	1 / 6	<div data-bbox="343 1030 1412 1579" style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;"><b>「虎の巻」の形式</b></p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>外面→</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>内面→</p>  </div> </div> <div style="border: 1px solid red; padding: 5px; margin-top: 10px; text-align: center;"> <p>外面に情報の比較の仕方が, 内面には新聞の割り付けの仕方(論の展開)が書かれてあるような形式で「虎の巻」を作成する。</p> </div> </div>	<p style="text-align: center;">図17 虎の巻(外面・内面)</p> 3 「割り付けの工夫」「論の進め方」という視点で壁新聞作成を振り返る。  <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <caption>学習の見通しをもつことができたか (人)</caption> <thead> <tr> <th>できた</th> <th>19</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>だいたいできた</td> <td>11</td> </tr> <tr> <td>あまりできなかった</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>できなかった</td> <td>0</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> <li>新聞を作る上でポイントにしたことやルールについて振り返らせる。</li> <li>壁新聞の班に分かれ, 自分たちが作成した壁新聞を2つの視点で振り返らせ, 学習の目的をさらに焦点化させる。</li> </ul> <div style="border: 1px solid blue; border-radius: 15px; padding: 5px; margin-top: 10px; text-align: center;"> <p>先輩として助言をしなくてはいけないという相手意識と, 自分で作成した壁新聞を振り返ることで, 一人一人に課題意識が生まれた。</p> </div>	できた	19	だいたいできた	11	あまりできなかった	2	できなかった
できた	19									
だいたいできた	11									
あまりできなかった	2									
できなかった	0									

4 次の視点をもって教科書の本文を読み、初発の感想を書く。  
(感想の視点)

- ① 意味の分からない言葉
- ② 論の進め方の特徴で気付いたこと
- ③ 初めて知ったこと

- ・ 抽象的な語句について、論の展開を追いながら理解させていく。
- ・ 初発の感想を視点に沿って書かせることで、生徒が気付いていることと気付いていないことを把握し、授業を進めた。

リサイクルのために他の資源がエネルギーも消費させるところ。

紙のリサイクルのときも他のエネルギーや資源が消費されること。

三つの具体例の中で、論が唯一異なる箇所に気付いている。

問題提起「循環型社会」は何か↓その説明④↓再び問題提起↓どうしたら実現できるか↓その方法の展開「リサイクルもまたエネルギーも消費しなくとも実現は可能か」が分かって分かりやすかった。

ではまずまたなどの語をつなげる言葉。  
例えば：節を出して、さらに分かりやすくし  
このように内容を分けてまとめることと、結論を出す

循環型社会の必要性を様々な例を挙げながらくわしく述べていた。

例の示し方や接続語、論の流れに気付いている。

図18 生徒の初発の感想

5 文章構成を確認し、筆者の主張を読み取る。

- ・ 既習事項を押さえながら、文章構成を考えさせる。

18-19	10-17	本	論	3-9	1-2	序論	18-19	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
結論	問題提起	本論	問題提起I	問題提起II	序論	要旨・キーワード	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
一人一人に加えて社会全体に波及させる	リユース	リデュース	リサイクル	問題提起②	持続可能な発展を目指す社会	問題提起①	「もの流」を一方通行	問題提起③	問題提起④	問題提起⑤	問題提起⑥	問題提起⑦	問題提起⑧	問題提起⑨	問題提起⑩	問題提起⑪	問題提起⑫	問題提起⑬	問題提起⑭	問題提起⑮

この文章は四つの意味段落に分けたが、構成としては、「序論→本論→結論」の形式になっていることを自分で分かりやすいようにワークシートにまとめている。

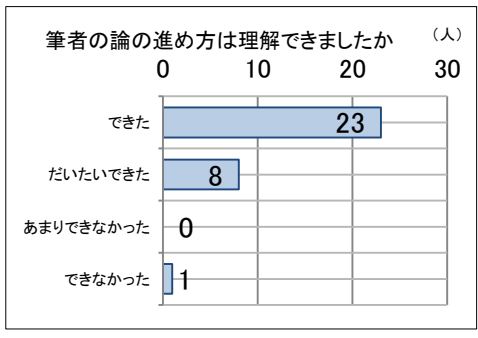
既習事項をスライドにまとめ、自分自身で確認できるようにした。

これまで学習したこと

序論(始め)	起	頭括型
本論(なか)	承	尾括型
結論(終わり)	転	双括型
	結	

図20 既習事項の確認(スライド)

図19 生徒のワークシート



- ・ 文章構成を捉えることで、筆者の主張も探しやすくなることを押さえる。
- ・ この文章は、序論・本論・結論の3段階に分かれており、双括型で書かれた文章であることを押さえる。

6 筆者の論の進め方をつかむ。

図21 生徒のワークシート(論の進め方)

第  
二  
次

7 筆者の論の進め方を壁新聞の形式に適用して、割り付けや作成方法を書き込む。(次頁参照)

- (1) 論の進め方を壁新聞にどのように適用させるかを考え、教師が準備した「割り付けしてある虎の巻シート」に項目を書き込む。
- (2) 教師が準備したシートでは、本教材の流れが当てはまらないことに気付き、新たなシートに割り付けし直す。



写真7 割り付けをする様子

- (3) 虎の巻シートにアドバイスを書き込む。
- (4) どのような割り付けをしたのか, 発表し合う。

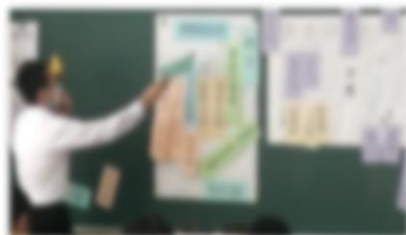


写真9 割り付けについて発表する様子

論の進め方と壁新聞の形式に共通した点があることは理解できましたか	0	10	20
できた			18
だいたいできた		12	
あまりできなかった	0		
できなかった	2		

- 黒板に教科書の全文を掲示し、筆者の論の進め方や論を進める上で重要な語句を色画用紙で示す。



写真6 板書

- 一人で考える時間を十分に確保する。
- 必要に応じてペアや小グループでの交流の場を設定し、気付いていない点に気付かせる。



写真8 学び合いの様子

- 新聞を作成するためには、論の進め方を意識して割り付けをする必要があることを理解させる。

分かりにくかったという生徒に対して、壁新聞の割り付けをしたシートを見ながら、個別に補充指導を行った。



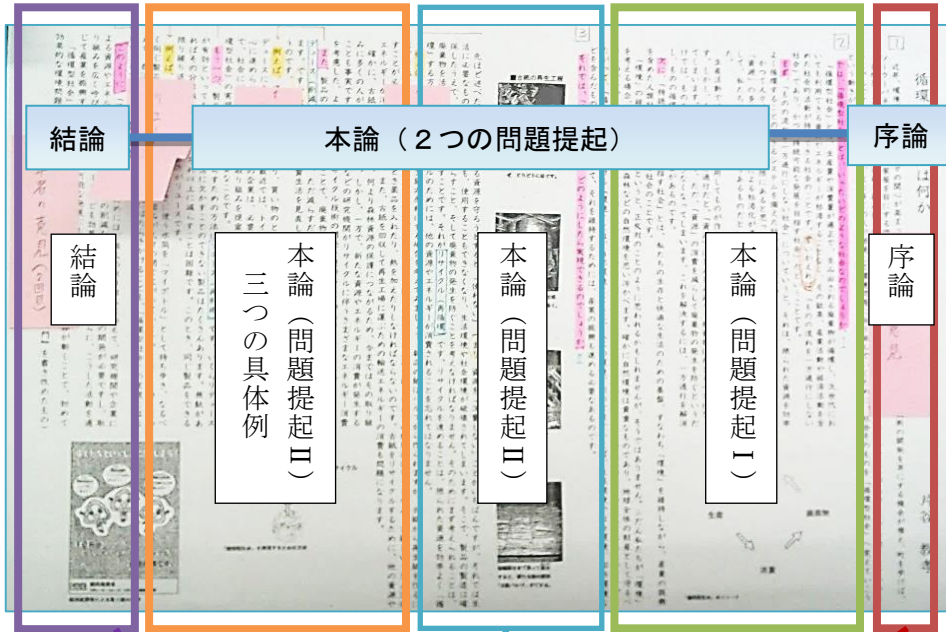
(例)

説明的文章の論の進め方を、壁新聞の割り付けに、どのように適用したのかを示した生徒のワークシートと学習の流れ



写真10 割り付けシートを交流する様子

論の進め方ワークシート



学習の流れ

① 文章が三つの意味段落で構成されており、本論は、内容ごとに問題提起が提示されていることに気付く。

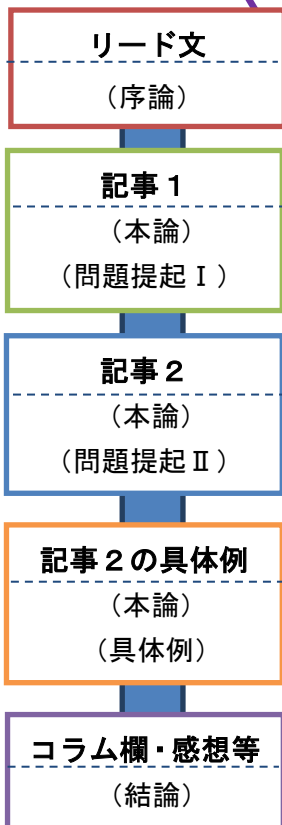


② 説明的文章の論の進め方を、壁新聞の割り付けに適用させる。



③ 割り付けの際に、説明文の用語を新聞の用語に変える必要があることに気づき、虎の巻作成に生かそうとする。

説明文の論の展開を意識した壁新聞の構成



壁新聞割り付けシート

図22 生徒のワークシート(壁新聞への適用)

<p>第二 次</p> <p>4 / 6</p>	<p>10 文章と志布志市の資料を比較して、新たな考えをもつ。</p> <p>(1) 志布志市の資料を読む。</p> <p>(2) 文章と志布志市の資料を比較して分析する。</p> <p>(3) 環境の取組について自分の考えをまとめる。</p> <p>(4) 「虎の巻」に書く文章を考える。</p> <div data-bbox="454 436 933 750"> <p>情報を比較する方法は理解できましたか (人)</p> <table border="1"> <tr> <td></td> <td>0</td> <td>10</td> <td>20</td> </tr> <tr> <td>できた</td> <td></td> <td></td> <td>20</td> </tr> <tr> <td>だいたいできた</td> <td></td> <td>11</td> <td></td> </tr> <tr> <td>あまりできなかった</td> <td>1</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>できなかった</td> <td>0</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> </div>		0	10	20	できた			20	だいたいできた		11		あまりできなかった	1			できなかった	0			<ul style="list-style-type: none"> <li>ワークシートにしたがって、筆者の論と志布志市の取組を比較させる。</li> <li>情報を比較するとともに、体験を踏まえて自分の考えを形成させる。</li> <li>複数の意見を関連付けて新たな考えを出す方法を全体で確認する。</li> <li>どのように比較して考えを深めたかを文章にするように指示する。</li> <li>複数の資料を比較するには、視点が必要であり、ある共通した項目ごとに内容を拾い上げ、比較することが効果的であることに気付かせたい。</li> </ul>					
	0	10	20																								
できた			20																								
だいたいできた		11																									
あまりできなかった	1																										
できなかった	0																										
<p>第三 次</p> <p>5 ・ 6 / 6</p>	<p>11 「壁新聞作成のための虎の巻」を作成する。</p> <p>12 虎の巻を仕上げ、交流する。</p> <div data-bbox="438 907 869 1120"> </div> <p>写真 11 交流の様子</p> <p>13 学習したことを振り返る。</p> <div data-bbox="454 1288 933 1601"> <p>国語科の学習を他の学習に生かせるのだと実感できましたか (人)</p> <table border="1"> <tr> <td></td> <td>0</td> <td>10</td> <td>20</td> <td>30</td> </tr> <tr> <td>できた</td> <td></td> <td></td> <td>23</td> <td></td> </tr> <tr> <td>だいたいできた</td> <td></td> <td>8</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>あまりできなかった</td> <td>1</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>できなかった</td> <td>0</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table> </div>		0	10	20	30	できた			23		だいたいできた		8			あまりできなかった	1				できなかった	0				<ul style="list-style-type: none"> <li>テンプレートの形式にしたがって、原稿を仕上げさせる。</li> <li>交流のポイントを伝え、交流が充実するようにする。</li> </ul> <div data-bbox="981 974 1412 1131" style="border: 1px solid blue; border-radius: 15px; padding: 5px;"> <p>交流の後、生徒は各々、原稿の修正を始めた。最終的には、教室が静まりかえるほどの真剣ぶりであった。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>スライドで、他教科等の学習との関連も踏まえて、学習してきたことを振り返らせる。</li> </ul> <div data-bbox="981 1310 1428 1601" style="border: 1px solid red; border-radius: 15px; padding: 5px;"> <p>生徒の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「虎の巻」を作成することで、筆者の論の進め方や情報の比較の仕方などを詳しく勉強することができた。</li> <li>国語の学習が他の教科でも生かせることが分かった。</li> </ul> </div>
	0	10	20	30																							
できた			23																								
だいたいできた		8																									
あまりできなかった	1																										
できなかった	0																										

(5) 本単元における評価と社会科や理科との連携

ア 国語科の評価

毎時間の生徒による自己評価やワークシートの状況から、生徒一人一人の学習の定着状況を把握し、補充指導するとともに、第三次で作成した虎の巻を、鹿児島県総合教育センターが提案している「判断基準」を基に、評価を行った。

表 5 虎の巻の「判断基準」

尺度	判断基準
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>ア 筆者の目的や意図に応じた論の進め方を既習事項を使って表現できている。</li> <li>イ 説明的文章の構成を壁新聞の形式に転用できている。</li> <li>ウ 自分の考えを形成するための方法として、複数の資料を関連付ける方法を説明できている。</li> </ul>
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 既習事項を別の言葉に言いかえて説明している。</li> <li>○ 壁新聞記事の流れを踏まえて、分かりやすく説明している。</li> <li>○ 複数の資料を比較して、自分の論をもつとともに、どのように比較したらいいかをわかりやすく説明している。</li> </ul>
C状況の生徒への補充指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 壁新聞の割り付けを示し、どの部分にどんな事柄が入るかを考えさせる。</li> <li>○ 昨年度作成した壁新聞を見ながら、説明的文章と比べさせる。</li> </ul>
B状況の生徒への深化指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ それぞれの記事の関係やつながりを考えさせる。</li> <li>○ 既習事項を壁新聞の形式で使う場合は、どのような言葉になるかを考えさせる。</li> </ul>



**虎の巻 内面 (壁新聞シート)**

**【判断の要素】**  
ア 論の進め方

〈判断基準B〉  
論の進め方を矢印で示し、序論から結論までの流れを言葉で補足している。

**【判断の要素】**  
イ 適用

〈判断基準B〉  
論の展開(段落構成)に基づく壁新聞の割り付けができる。

**【判断の要素】**  
ウ 複数の情報の比較

〈判断基準B〉  
複数の資料を比較するには、同じ観点で見て、違いや共通点を見いだすことが大切だと述べている。

ほとんどの生徒が説明的文章の学習を適用させ、壁新聞を作成した人にしか分からないようなアドバイスを、自信をもって書いている様子が見えたと。説明的文章の論の展開等を壁新聞の割り付けに適用させられなかった生徒には、後日個別指導を行った。

※「判断基準B」：おおむね満足できる状況

図23 虎の巻の評価

イ 社会科の言語活動の見取り

〈問題〉  
右の3つの資料を見て、鹿児島県で起こりやすいと予想される災害について、分かりやすく説明しなさい。

資料1 九州地区の火山分布

資料2 鹿児島県のシラスの分布

資料3 鹿児島県の雨温図

〈国語科の評価規準に基づく「判断の要素」〉

資料を関連付けて、予想される災害について、分かりやすくまとめている。

- ① 文章と図表との関連 (1年 言イ)
- ② 説明する内容と資料の対応 (1年 Cイ)

〈判断基準B〉

- ① 資料から分かることを読み取っている。
- ② 複数の資料を関連付け、解釈したことを基に、自分の考えをまとめている。

〈生徒の解答例〉

資料1より、①各地に火山が分布しているため、火山灰などの被害や雲仙岳のような火砕流、大正大噴火のような大きな噴火が起こる可能性がある。

そして資料2より、②鹿児島県内の大多数がシラス台地となっていて、鹿児島市もその分布に含まれていることが分かる。シラス台地は、水を含むとろくなる性質があるため、資料3から分かる③降水量の多い6～7月（梅雨時期）には土砂崩れが起き、市街地に近いところで大きな被害が起こる可能性がある。




写真 12 社会科の学習の様子

※ 社会科の評価規準に基づく評価については、社会科の担当が行う。

図24 社会科で実施された言語活動の見取り

(6) 検証授業Ⅱの成果と課題

ア 成果

- (ア) 国語科が定着させるべき指導事項に社会科や理科の言語活動を関連させるだけでなく、生徒が実際に作成した壁新聞を使い、壁新聞を作成した先輩として後輩に作り方を伝授するという、生徒にとって学んだことの活用を実感できる課題を設定したことで、生徒に達成するための意欲を喚起させ、学習に対する興味・関心をもたせることができた。
- (イ) 学習の見通しをもたせる際に、以前に学習した内容を振り返ることから課題を見いだすことによって生徒の意識をより焦点化することができた。
- (ウ) 1単位時間の授業が途切れないように、単元を貫く課題解決的な言語活動につながるような力の育成という点を意識した指導計画を立案し、授業を行うことによって、生徒の学習意欲を持続させることができた。
- (エ) 導入で見いだした課題から設定した学習の視点と評価の観点が一貫していたことが、生徒にとって明確な評価になり、できるようになったことの実感につながったと思われる。また、授業内容と社会科の学習等を生徒に分かりやすく関連させられたことにより、国語科の学習を他の学習に生かすことが可能であることを、実感を伴って理解させることができた。

イ 課題

- (ア) 中学生にとって、切実感のある学習課題を立てるのはそう容易なことではない。どのように学習課題を設定し、生徒自身に課題意識をもたせるかを工夫していく必要がある。
- (イ) 今後、文章内容はますます難解なものとなり、読解することすら難しくなる。詳細な読解に陥らずに、単元を貫く課題解決的な言語活動をどのように取り入れながら学習を進めていくかを工夫する必要がある。
- (ウ) 一つの単元に、主たる指導事項と前単元の学び直しのみならず、他教科の言語活動との関連を図りながら単元を構想するのは難しい面もある。教師間の連携を踏まえて、長期的に取り組めるような手立てを工夫する必要がある。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

- (1) 社会科や理科との連携を図った単元構想に基づき設定した言語活動を、単元を貫いて行うことにより、国語科の学習は他教科の学習にも生かすことができることを、97%の生徒に実感させることができた（図25、写真13）。

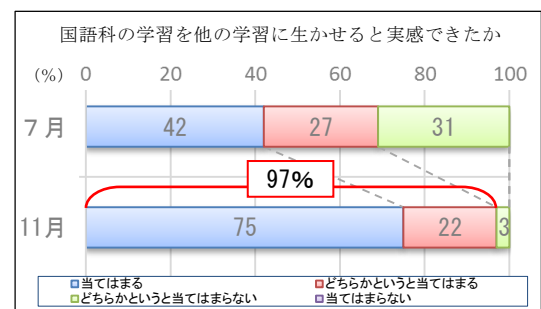


図25 生徒の意識調査結果

日常生活下の思いの所での関連や、他教科との結びつきが実感できず、そんな一週間でした。相手に丁寧に分かりやすく説明するということ、複数の情報を見やすく比較すること、そしてその内容を環境整新聞に転用すること、今まであまり視野がなかった私の範囲がぐんと広がったような感じがします。

与まらぬ文章で説明するのはとても苦しかった。社会や理科でも資料と見比べて、実験結果から導き出すのができる。空想と現実を分けてほしいがらだった。しかし、この国語の授業で論の進め方や資料の比較のしかたと学び前以上にできるのではまいかと思えるようになった。また、生徒会長として生徒総会や代議員会、その他が役員に説明したりする場面が増えているので、国語の学習を活かして分かりやすく説明したい、ともいい機会となった。

写真13 学習後の生徒の感想

(2) 単元を貫く課題解決的な言語活動や他教科の学習の見取りの結果に基づき、国語科の学習で補充指導を行うことにより、91%の生徒に学習して身に付いたことは何かを実感させることができ、生徒に国語の学びを実感させることができた。また、国語科の学習を行う際に他教科等の学習との結び付きを踏まえて学習するようになったという生徒が85%いたことから、国語科で学んだことを他教科の学習に生かそうとする生徒の意欲が感じられ、生徒の学習が主体的な学びに変容しつつあることがうかがえた (図26)。

## 2 今後の課題

(1) 社会科や理科の言語活動を把握し、単元構想に加えたり、同時期に国語科で身に付けた力を活用する場面として、他教科の言語活動と関連付けたりすることによって、生徒に国語科の学習で身に付けたことを社会科や理科の学習に生かすことができるという意識をもたせることはできた。今後は、他の領域と他教科との連携を図り、継続した単元構想と言語活動の充実を推進していきたい (図27)。

(2) 生徒に、国語科の学習を他に生かすことができると実感させることはできたものの、学習した後に、次の学習へのイメージをもたせるなどの具体的な行動にまではつなげることができなかった。他教科等との連携を図る中で、新たな力を必要としたり、身に付けた力を生かす場を模索したりするような姿が見られるように、主体的な学びを引き出す工夫を続けたい (図28)。

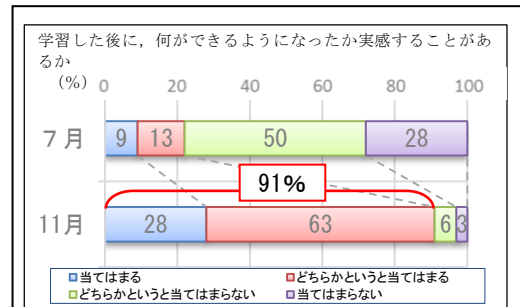


図26 生徒の意識調査結果

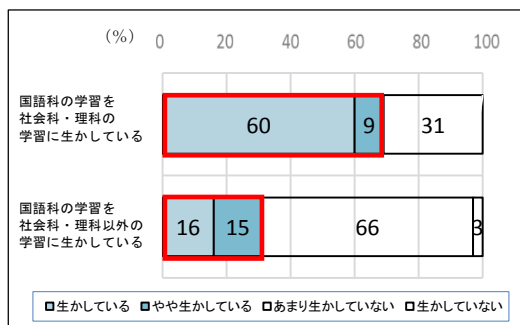
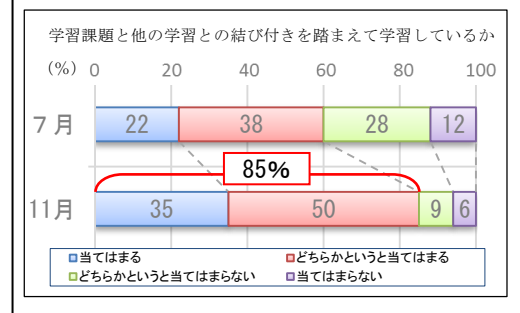


図27 生徒の意識調査結果

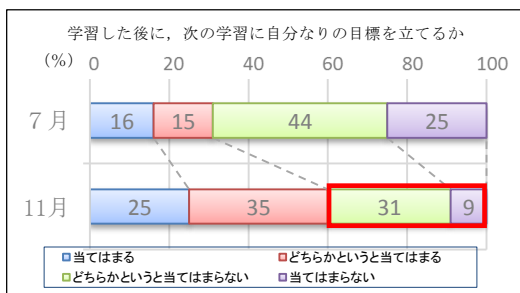


図28 生徒の意識調査結果

長期研修者〔 日高 佳子 〕

担当所員〔 宮脇 一郎 〕

#### 【研究の概要】

本研究は、生きて働く国語の能力を育成するため、生徒の国語科の学びの意義や価値を実感させ、生徒の主体的な学びを実現する国語科指導の在り方を追究したものである。

具体的には、「社会科や理科との連携を図った単元構想」、「社会科や理科の学習を国語科の観点で見取る方法」、「評価の在り方」の工夫を行った。

その結果、国語科の学習を他教科の学習で生かすことができると実感した生徒の学びが主体的になっていく姿を多く見ることができた。生きて働く国語の能力を螺旋的に高めていくためには、国語科のみならず、実生活の様々な場面における言語活動を想定しながら、課題解決的な学習や評価の充実を図っていくことの重要性が明らかになった。

#### 【担当所員の所見】

本研究は、実生活や他教科等の言語活動で発揮されるべき国語の能力を見据えた国語科学習指導の在り方を追究したものである。

本研究の特色は、「読むこと」の領域において、国語科の学習と社会科や理科で行われる言語活動を有機的に関連付け、生徒自らに国語科の学習の価値や意義を実感させる単元構想や評価の在り方を工夫したところにある。

具体的には、社会科や理科における生徒の言語活動を国語科の評価規準に基づく「判断基準」により評価し、評価に基づく国語科の単元構想や言語活動設定の工夫が、生徒に国語科の学習の価値や意義を実感させ、主体的な国語科学習を実現する上で大きな効果を上げている。

本研究の視点は、次期学習指導要領改訂に向けた「論点整理」で述べられるカリキュラム・マネジメントの視点と共通するものであり、まさに時宜を得たものと言える。今後、さらに教科間の連携を広げ、「生きて働く国語の能力」育成を見据えた国語科の学習指導が充実することを期待する。